

仏教語彙意味変化の 新聞記事データベースによる追跡*

角 岡 賢 一

▶ キーワード

仏教語彙
意味変化
新聞記事データベース
教義本来の意味と一般
語義
語彙史

▼ 要 旨

この小論では、仏教語彙が本来の教義を離れて意味が一般化した過程を語彙誌的に跡付ける試みを行う。まず直近20年間の新聞記事をデータベースによって検索し、共時的視点から分析を行う。次に時代を遡り、本来の意味から逸脱し始めたのがどの時代であったかを探る。

検証の対象としたのは、次の八語彙である。

他力本願、お題目、一蓮托生、億劫、極楽浄土、唯我独尊、後生大事、啐啄同時
各語彙が新聞記事でどのように用いられているかによって、仏教語彙本来の意味であるか一般化した意味かに分類した。その比率の比較は、語彙項目毎に大きな偏りがあった。「極楽浄土、啐啄同時」の二語は九割以上という高率で本来意味での記事が見られた。それ以外の六語はいずれも、この比率が一割未満であるという極端な偏りが見られた。

* 本研究は、2006年度本願寺財団研究助成を受けています。(研究課題「一般社会に流通する仏教語彙の意味変遷について」)

1. はじめに

仏教語彙を言語学的観点から研究することは、数年来先行研究で継続してきた（角岡（2003, 2004, 2006））。この小論では特定語彙の意味変化を主として新聞記事データベースによって追跡し、仏教語彙が本来の意義からどのように意味変化していったかを実証的・数量的に把握することを目的とする。また通時的手法として、いつごろから意味変化が生じていったかを本格的に追跡する試みは今後の研究課題とする。現段階で、今後の研究方針を考慮に入れた作業仮説を次のように考えてみる。

- (1) 仮説：当該語彙が日本語に借入された時期が古ければ古いほど、仏教語彙から一般語彙への意味変化の度合いが大きい

この仮説が意味するところは「ある語が仏教語彙として日本語に導入されて時間が経過するにつれ、仏教語本来の語義を離れて意味が変化していく蓋然性が高いであろう」というものである。借入または造語されて短時日の語彙よりも、一定時間を経過して語彙階層に定着したものの方が意味変化を経る蓋然性が高いであろう、という一般的な傾向を仮説とした。語義の変化にはこのような時間的側面だけではなく、使用頻度や語彙そのものが持つ意味範疇など複雑な要素が錯綜しているものと考えられる。この小論では紙幅の関係から仮説(1)を検証するデータの一部を提示することが主となり、仮説の妥当性そのものには立ち入ることは不可能である。

角岡（2006）では仏教語彙を時代別に跡づけて、小規模ながら独自のデータベースを作成した。この方法論に準拠すれば、日本での仏教語彙としての初出年代を辿ることも一定程度可能である。このような年代差と、意味変化の大きさを相対化することができれば数量的研究が可能となるであろう。この小論ではこの方針に沿って、辞書を参照することにより研究方法の確立を目指す。時間的経過を考慮に入れた方法論確立については、幅広い視点からの立論が必要である。このことについて今後、注意深く方法論を構築していく。

森（編、1991：1）では、仏教語彙本来の語義と一般に通用している語義との「かかわり」を次の3種類に分類している。

- (2) 1. 仏教語が国語としてそのまま採り入れられている場合。

例：四苦八苦 四天王 慈悲 寿命 醍醐味 旦那 長広舌 二枚舌 馬鹿 など

2. もともと仏教に起源を有しながら、国語としては意味が全く変化している場合。

例：縁起 有頂天 億劫 我慢 愚痴 言語道断 出世 無分別 など

3. たまたま同一の表記であるが、両者の間には全く何の関係もない場合。

例：愛 開会 仮名 空 知識 変化 法律 無為 無学 など

これら3分類のうち1は、仏教語彙が意味無変化のままで一般語彙として流通しているものと見なして差し支えないであろう。2は、仏教語彙起源でありながら一般語彙としては意味変化

が見られる部類である。その変化の過程は言語学的にも興味を惹かれる。3については、一般語彙としての語源が仏教語彙に求められるとすれば「無関係」と見なすことに疑問が生じる。すなわち、仏教語彙と一般語彙とで同一表記をしているのが偶然であるか否かの判断は文献学的に行われるべきであると考えからである。言い換えれば、上掲2と同じように仏教語として出発しながら一般語彙への変化を経ている事実が文献によって裏付けられれば、3として別範疇を立てるのは誤りとなるからである。

他方で角岡（2003：21）は、原義あるいは仏教語としての読みから変化のあった142語を、意味のみ・意味＋読み方・その他（語源、禅語、短縮、非仏教語^{*1}）・読みと分類している。それ以外に、読み方・意味共に無変化の十語がデータベースに収録されている。大部分が仏教語彙として借入されたこれら語彙は、種々の意味変化を経て一般化されてきた。この小論ではその意味変化の終着点として、現代新聞記事での諸相をデータベース検索によって追跡する。

次に、どのような方法で語彙項目を検証していくかという手順を提示する。

インターネット版朝日新聞記事検索「聞蔵Ⅱ」（<http://database.asahi.com>）は、1985年以降の朝日新聞・『アエラ』・週刊朝日の見出し及び記事を収録している。ここには、全国各地の地方版記事も含まれている。「全期間」で検索すれば、約20年分の記事から当該語彙が自動的に集計され、件数が表示される。全記事の約1割は著作権により、見出しのみの表示で記事の中身は省略されている。以下の議論では、記事の中身を確認できないために集計から除外する。分析に当っては記事全文を参照して、仏教語として本来の意味であるか一般化されているかを分別する。記事は毎日蓄積されていくので、検索する日によって該当する件数は変動する。従って、ある語彙をいつ検索したかを表示しておくことは必須である。また語彙間の比較を行うためには、検索期日を揃えておく必要があるが、全ての語彙項目を1日で検索することは不可能であるため、基準日を設けてその日以前に掲載された記事の件数で数的処理を行う。

以下の節では先行研究で意味変化有りと認定された語彙を「聞蔵Ⅱ」によって検索し、教義本来の用法と一般語義で使用されている例を分類する。「他力本願」「お題目」は2007年10月11日に検索を実行した。他の項目はこの日以降の検索であるが、件数集約の基準を揃えるために同日以前の記事のみ集計に含めることとした。記事には、検索時の通し番号・掲載日付・掲載紙（誌）・ページ数・分類番号・記事の文字数が附されている。以下では、記事末尾にこれらを引用した。データベースでは振り仮名は括弧内に表示されているが、以下の引用では煩雑になるため、上付で示す。引用は、基本的に段落単位で行う。当該語彙がどのような文脈で用いられているかを明示するためである。

以下の分析においては、仏教語彙本来の意味で表現されていると判断される場合に「本来用法／正用法」、本来義から逸脱して一般語彙化していると判断される場合には「一般化用法」と表示する。

2. データベース検索の結果

本節においては個別語彙項目について、新聞記事データベース検索の結果を示す。本来の意味あるいは一般化された意味で、典型的な用法と思われる記事を引用する。

・他力本願

この語は、浄土宗に源を発し（浄土）真宗に至るまで、教義の根幹をなすと言って良い重要な語彙である。而るにデータベース検索の結果によると新聞紙上での用例は本義を逸脱し、「他人頼り、他人任せ」という意味合いで用いられている場合が多いという実態が浮き彫りになっている。

データベース検索では、216件が該当した。そのうち約1割に相当する26件が見出しのみの表示で、記事が表示されなかった。記事全体を読むことが可能な190件のうち、教義本来と同様の趣旨で記事にされていたのは15件に過ぎなかった。

数量的には、「他人頼り、他人任せ」という意味で用いられていた場合が190件中173件と92%以上を占める。まず一般化用例を見てみる。

- (3) 今季は残り8試合。Jリーグ参入の条件は4位以内で、現在4位のチームとは勝ち点13の差が開いているが、まだあきらめていないという。「全勝して上位チームが負けることを願う。他力本願も含めてサッカーにはミラクルがあるんだ」(00001 2007年10月2日 朝刊 鳥取全県・2 地方 033 01452文字)
- (4) 石原慎太郎は、外交官、海軍士官、会計士、映画監督と志望を転じたのちに作家となり、政治家となった。その道程は、戦前の平和、戦中に頭上に見た敵機、「他力本願」が身にしみついた戦後日本へのいらだちからもたらされた『国家なる幻影』（彼の政治家としての自伝にして代表作の題名）によってやむを得ず曲折したのだが、戦前的モラル喪失への悲しみと「文学青年」ぶり、すなわち彼の本質は、「おじいさん」となってもかわらない。(00006 2007年4月10日 朝刊 朝刊文化 027 01625文字)
- (5) 倉石忠雄氏「現憲法は他力本願。×××のようなものだ*2」(68年)→農相辞任(00132 1995年11月30日 朝刊 政治 007 03419文字)

このような一般化用例は、分野では(3)のようなスポーツ記事、あるいは(4)や(5)のような政治記事に多いという傾向が窺える。スポーツと政治―選挙に共通しているのは、勝ち負けを伴うという点である。いずれも自分の努力だけではなしに他人の勝敗によって自分の命運が変わる、という要素を捉えて「他力本願」と表現している。(3)では当該語は明らかにサッカー監督の発言中に含まれている。しかし(4)は、石原慎太郎・東京都知事自身の言によるのか、記者による表現なのか定かではない。括弧付きで引用されているのは、記者が「浄土系教義における意義から逸脱している」と認識している事実を示唆していると考えられる。(5)は極端な例で、現職閣僚による失言であり、これが直接の原因で閣僚辞任に至った。発言当時は、日本国憲法が公布・施行されて20年を経た時点であったが、現行憲法が「占領軍による押しつけである」という論は一部論者にとっては当時も今も根強いと見える。

ここで留意したいのは、このような「他力本願」の一般化発言がスポーツ関係者や政治家によって行われ、それがそのまま新聞紙上に報道されるというのに限らないという点である。以下で見るように、校閲部記者が正用法・本来の意義での使用を解説するのと裏腹に、新聞記者自身による一般化も記事中に見受けられる。上掲(4)のように、新聞記者本人の表現による可能性が残る場合も含めてである。

次に、教義本来の意味合いで記事化された場合を検証する。これらは全件数17件と少ないが、次のように大きく分類することが可能である。

- (6) 甲（四件）：講演などで、当該語彙や教義について話される行事の案内
- 乙（十一件）：教義を深く掘り下げる内容
- 丙（二件）：企業による広告宣伝や、テレビ番組での語彙濫用について教団が抗議した事実を報道したもの

甲の部類は、記事の中で「他力本願」という教義について話されますよ、という紹介である。記事を書いた記者の主観を交えていないという意味で、乙・丙に比べて「客観的」であると言える。乙類は記事の中で本来の意義について触れ、核心に踏み込んだ内容になっている。新聞記者の考えではなく、教義に深い理解を示している人物の発言などを引用していることが多い。丙類は客観的な報道であるが、当該語彙の濫用に対する教団の抗議を報じている。以下に甲類四例のうち一例（7）、乙類十一件から二件（8）、（9）、丙類は全二件（10）、（11）を挙げる。

- (7) 法然房源空著「^{せんぢやく}選択本願念佛集」を読む 14日13時半～15時45分、京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町の法然院。他力本願念仏の教えについて書かれた「選択本願念佛集」を読む。講師は梶田真章貫主。初めての参加者はテキスト代千円が必要。参加料は志納。(2006年12月12日 夕刊 こころ 003 00426文字)
- (8) 「本来は、仏道を解して楽しむ、という意味だったはずの言葉が、日常に入って来た時にだんだんと意味がゆがめられ、放蕩や遊蕩といった感心しない意味に使われるようになった」。「道楽」のほかにも「大袈裟」や「他力本願」といった言葉を挙げながら「仏教語のすべてではないが、日常化する中で意味が“転落”してしまった。『道楽』もその一つだ」と述べた。(00009 2007年3月16日 夕刊 文化 008 00987文字、木津川 計・立命館大学名誉教授)
- (9) 「他力本願」を辞書に当たると、本来の仏教の意味と「他人の力を当てにすること」が併記されている。「他力本願では成功は望めない」と、用例を載せているのもある。しかし、浄土真宗の関係者には根幹をなす教え。こうした使い方は「宗教的屈辱とさえ映る」という。(00102 1998年1月9日 夕刊 HL 002 00390文字、校閲部・上嶋隆昌記者の署名入り)
- (10) 浄土真宗の10の宗派でつくる真宗教団連合（理事長＝武野以徳・浄土真宗本願寺派総長）は27日、オリンパス光学工業（本社・東京）の新聞広告で「他力本願から抜けだそう」という表現があったことについて、同社に抗議文を送った。(00045 2002年5月28日 朝刊 2 社会 034 00293文字)
- (11) 浄土真宗本願寺派（西本願寺、京都市下京区）は28日、フジテレビ（本社・東京）系列で放映しているタモリの「笑っていいとも」の今月3日放送分で宗派名をパロディー化し、安産祈願と称するコーナーで「開祖淫乱上人騒動宗他力本願寺派」としたのは「実在する宗派や宗祖親鸞聖人を、あこぎにもじり、宗教活動を妨害するものだ」とフジテレビに番組の中での謝罪と謝罪文を要求する抗議書を発送した。(00219 1985年10月29

(8)、(9)に分類した乙類は、教義に踏み込んだ内容の記事が種々見られる。例えば、「この語本来の意味をこれまで知らずに誤用してきた」と告白する64歳男性読者の投稿も含まれている。

教団の抗議を報じた記事＝丙類は「他力本願」の教義に関連するところから、広義には乙類に含まれるが、当該事案の重要性を勘案して独立した分類とした。企業による宣伝広告やテレビ番組で一般化用例が流布されているというのは、「他力本願」という語がいかに教義から逸脱して一般化しているかという事実を表す証左であろう。現実には教団が企業やテレビ会社に抗議しているのは、浄土真宗関係者には「屈辱的とさえ映る」という上掲(9)の指摘を裏付ける結果となっている。

結論としてこの語彙に関して導き出せるのは、正用であるか一般化であるかは記事の分野によって明確に二分される、という事実である。正用法は宗教や教義に関する分野に限定され、一般化はスポーツや政治という勝ち負けに関わる分野が多い。この原因は、本来は阿弥陀如来の力を意味する「他力」という字面が「他人」という解釈へと広がっていく過程で、後半二字の「本願」が付随的に扱われるようになったという経緯に求められるであろう。

・お題目^{*3}

「お題目」とは「南無妙法蓮華經」七字を指し、蓮華經を重要視する日蓮宗の根本教義に連なる。データベース検索では578件が抽出された。このうち66件は見出しのみ表示で記事本文が検索できなかった。512件の記事本文から明らかになったのは、教義本来の使用と一般的に流布した用法においても共通する「お題目を唱える」という連語形式での出現が多いという点であった。

記事本文検索512件のうち、「南無妙法蓮華經のお題目を唱える」という正用法は34件と認定された。残る478件は「形式のみで、内容の伴わない言葉」という意味で「お題目」と表現している。一般化用法が分布する分野としては、「口先だけで実行が伴わない」という含意から政治に関連した記事が多い。次に一般化用例二例を挙げてみる。

- (12) 政治家のお題目となっていた「中小企業のために」という言葉は今回の参院選で、ほとんど聞かれなかった。日頃でも中小企業対策については、それほど意識されなくなってきたように思える。「世界に冠たる日本の中小企業と充実した対策」という評価があるように、もはやかつてのように中小企業の重要性を訴えなくてもよい時代になってきたのかも知れない。しかし、それにしてもこれでよいのかと疑問に思えてくる。(00007 2007年7月27日 朝刊 2 商況 016 00758文字)
- (13) ノーム・チョムスキー著『お節介なアメリカ』 米国の政策、特に9・11以降の迷走を糾弾してきた著者の論評集。対イラク政策の失敗、中東政策のお題目「民主化促進」の陰で進む危機的状況など、現在の国際情勢における米国という「脅威」をあぶり出す。(00001 2007年9月30日 朝刊 読書 4 014 01179文字)

「他力本願」の一般化用例と同様、政治面で「お題目」という用例を見かけた場合、十中八九は本来の教義から逸脱した意味合いであると考えられる。上掲二例では「口先だけで実行を伴わない」という含意に加えて、お題目のように「常に口にするもの」という含みも加わっている。

一般化用例に分類しているが、特徴的なのが落語「^{かじかざわ}鰻沢」のサゲに現れる「お題目」である。これは「題目」と「材木」の地口になっている。

- (14) 身延山参りの江戸商人新助、小室山で毒消しの御符をいただき、法論石から鰻沢へ向かったが、雪の中で道に迷う。…〔中略〕…思い出したのが小室山の毒消しの御符。雪をはおばって御符を飲むと、体が動く。逃げ出すと、お熊が鉄砲を持って追いかけて来る。新助が行き当たったのは富士川の急流の^{だんがい}断崖。お題目を唱えてなだれとともに断崖を落ちると、道中差しがさや走っていかだをつなぐつるに当たり、いかだが落ちた。鉄砲の弾が新助をかすめる。気がつくと1本の材木につかまっている。「この大難を逃れたも御利益、お材木（お題目）で助かった」（00448 1991年3月17日 朝刊 東京 02022文字）

長編噺のサゲという重要な場面でこの地口が、一気に緊迫した場面から転換される鍵を握っている。「お題目」という語が日常的に用いられていなければ落語としての面白みを壊してしまう危険が潜む。従って「お題目」という語は「他力本願」に比べても、応用範囲が広いという傾向を示していると考えられる。データベースではこの他に二件、落語「鰻沢」についての記事が見られた。

落語の粗筋紹介でもう一本、用例が見られる。こちらは正用法である。「^{かげきよ}景清」という噺で、本来は上方ネタである。

- (15) 73〔歳：角岡〕の母親と2人暮らしの木彫師の定次郎が、突然失明した。「日朝様なら目の方は専門だから」と勧められ、赤坂の日朝様に三七・21日のあいだ願をかける。ご利益で少し視界が明るくなった20日目、夢中になってお題目を唱えていると、同じお堂の中でやはりお題目を唱える女の声。きくと「少しご無理なお願いがあつて」という。定次郎が「れき^{*4}のためなんでしょ」と親指を出すを通じない。（00443 1991年6月9日 朝刊 東京 02104文字）

ここでのお題目について、『桂米朝コレクション』第5巻では、「観世音南無仏与仏有因与仏有縁仏法僧縁、常楽我浄朝念観世音暮念観世音、念々従心起念々不離心」と「延命十句観音経」を唱えていることになっている。

落語から離れて、正用法に基づく記事を一つ紹介しておく。

- (16) 「午前中に仕事のない日は必ず、9時になると仏壇に向かいます。法華経の一節を5回読み上げて、お題目を唱える。仏様の教えの一つひとつの意味をかみしめるために、経文の漢字を目で追って声に出す。「今が始まり」と、気持ちをリセットするんです」（00108 2003年8月17日 朝刊 2 家庭 024 00907文字、女優の杉田かおるさん）

このように仏法勤行の一環として本来意義に基づく用例は、正用法34件の大半を占める。

正用法として報道された記事における「他力本願」と「お題目」の差について、次のように指摘しておく。「他力本願」に関する記事においては、この語彙項目が一般化されて流布するにつれて「阿弥陀如来のお力に縋って極楽浄土に往生を遂げる」という教義から著しく逸脱したため、本来の意義を強調する記事に特化している。それに対して「お題目」は、一般的な一般化用法においてもなにか特定の文言を唱えるという部分は維持される。正用法による記事本文中でも、「南無妙法蓮華經の七字を唱える」という以上に教義に踏み込む必要はない。従って(16)のように、日常生活の中に信心が溶け込んでいる趣の記事が多くなるのであろう。

・一蓮托生

これまでの二語彙と異なり、「一蓮托生」では語源的本来用法が少なく、一般化用法が圧倒的多数を占める。データベース中には139件が該当したがそのうち20件は見出しのみであった。残る119件のうち本来的用法と見なすことが出来たのは次の一例のみ、しかも俳句での引用であった。

- (17) 「^{いちれんたくしやう}一蓮托生^{じゅうや}」お十夜に聞く法話かな (00015 2005年12月14日 朝刊 山梨全県・2 地方 030 02160文字)

この句においては「法話を聞く」という文脈での例であり、本来の用法と考えられる。しかしそうであるとしても、この語が持つ中身に深く踏み込んでいないのは、俳句という短詩形式が本質的に持つ限界であろう。次節の本来的語釈で説明されているように、仏教においてこの語は「来世において一つ蓮華の上に生まれる」という間柄を指す。新聞記事データベースでは、この句を含めてそのような内容に踏み込んだものは見られなかった。

残る118例は比喩的な一般的用法であり、「連帯責任」という意味合いを一蓮托生という表現で言い換えている。当然ながら蓮の花とは何の関係もなく、来世という含意もない。二例を挙げる。

- (18) 対照的に小泉・安倍政権下で要職を務めた知名度を生かし、「先行逃げ切り」を目指すのが麻生氏。小泉・安倍政権と一蓮托生だった麻生氏か、それとも距離を置いてきた福田氏か——。焦点はそこに絞られた。(00002 2007年9月14日 朝刊 2 総合 002 02576 文字)
- (19) 今回はテレビ局が矢面に立っているが、ブームを仕込み、それにあやかり便乗しようとした関係者にも、一蓮托生の罪があるのではないか。製造業、販売業、番組情報誌出版社や新聞社……。「耳寄りの情報」に群がる私たちは皆、生活者をあおり立てたという意味で「共犯」だと思う。(00007 2007年2月16日 朝刊 オピニオン 2 012 00500文字、読者による投書、コンビニ経営者、青森県十和田市、57歳)

このように「一蓮托生」に関してデータベース中に、一例(17)を除いて仏教用語としての用法が見られない。「お題目」のように本来の意味を残しながら一般語彙としても流通するか、

あるいは「一蓮托生」のようにほぼ完全に一般化してしまうか、語彙によってその差が生じる原因を追及するのは今後の課題である。

・億劫

「億劫」も「一蓮托生」と同様に、データベース中では一般化した用例での記事が圧倒的に多かった。該当した190件のうち見出しのみが48件と、他の語彙項目に比べて記事の内容を参照できない比率が高かった。記事全文を読むことが可能な142件中、本来的用法は僅かに2件であった。社会面での用語解説(20)と、催しの案内(21)である。

- (20) 仏教から来た日本語は多い。例えば「億劫」の「劫」は、「永劫」と同様、きわめて長い時間を表す。時間がかかり、やりきれないことから、煩わしいとの意が生じた。(00016 2006年7月14日 夕刊 1 社会 011 00469文字)
- (21) 親鸞考座 28日午後7-9時、富山市浜黒崎の富山常楽寺。親鸞に学ぶ市民の会主催。浄土真宗本願寺派光照寺住職の公文名真師の「一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべし、ということ……」。参加無料。問い合わせは同会世話人の黒田さん〔電話番号は省略〕(00152 1997年1月23日 朝刊 富山 00597文字)

(20) では語の起源と共に、意味変化の原因にまで言及されている。(21) は八十億劫という具体的数量を伴っている文脈中での「億劫」二字であるという点で、厳密に定義すれば他の例とは根本的に異なる。しかしながらこの文脈では「劫」という本来の定義に沿った例であり、集計に含めて考察していく。催しの案内という点では「他力本願」での正用法分類(6)の甲類に相当する。一個人の生物学的生命という観点からは、一劫という時間でさえ想像することも叶わないような観念である。それを「八十億劫」とまで誇張するのは、インド流の哲学であろう。

これら2例を除く140件の記事は、一般化された意味での用例であった。次に2例を挙げる。

- (22) 山に溶け込みたい、などと贅沢なことは言いませんが、身近にある草花の姿を観察し、遠くに見える山々の稜線を目でなぞって「あそこは登りがきつかったなあ」と思っている、挨拶のたびに中断します。登りで息が切れていると、返礼もつい億劫になります。(00001 2007年9月27日 朝刊 オピニオン 2 014 00513文字、大学非常勤講師、東京都国分寺市、68歳)
- (23) 全国的にも使われますが、山梨の年配者がよく使う「オクケーなこんですじゃん」も漢字で書けば「億劫なことですね」で原義は計り知れない年月のことをいいますが、面倒なことという意味になります。(00060 2003年9月20日 朝刊 山梨 2 026 01068文字)

(22) は読者による投書、(23) は山梨地方版での記事で甲州方言を題材としており、本来意義への言及も見られる。これらの例が示すのは、年齢層や地域を問わずに「億劫」が一般化されて通用しているという事実である。原義と意味変化に言及した(20)で指摘されているように、一般用法では「煩わしい」という以外に「長時間」という概念は痕跡をも留めていない。

・極楽浄土

「一蓮托生、億劫」の二語は、仏教語彙本来での用例が皆無と言っていいほどであった。これに対して「極楽浄土」は比喩的用法が発達する蓋然性が高いように思えるが、実際にデータベースを検索した結果は、意外にも本来的用法が大半であった。その意味で上掲二語とは対照的である。データベースで検索した406例のうち、59件は記事の中身に立ち入ることが出来なかった。残る347例のうち、一般化用法は僅かに12例のみであった。本来化用法の比率は96.5%に達する。

本来的用法の例では、文字通りの宗教的境地を表現した記事が大半であった。以下に2例を挙げる。

- (24) 黄金で囲まれた領主の^{れいびよう}霊廟、仏教伝来の東の終着点に出現した浄土世界の具現化など、世界へのアピール度は決して低くない。だが、世界文化遺産の採択が厳選化する中で、国内では、地上の極楽浄土を表現した「平等院」など類似の概念の施設を持つ京都がすでに登録された。平泉が光り輝くにはやはり「個性とわかりやすさ」が必要だ。(00006 2007年8月31日 朝刊 岩手全県・1 地方 031 01766文字)
- (25) 県内に残っている絵図や^{まんだら}曼荼羅などから、昔の人々が極楽浄土や地獄に抱いたあこがれや恐れを探り、人々が死後の世界に対しどんなイメージを描き、表現したのかをみる。(00007 2007年8月15日 朝刊 和歌山 2・1 地方 024 00520文字)

いずれも、仏教寺院に保存されている事物から理想郷に至る境地を記事にしたものである。これ以外の記事も、概ね同様に極楽浄土についてそのまま述べている。本来用法での「極楽浄土」使用記事が多いことは、仏教思想の中でもこの概念が生活に深く浸透している傾向を示唆しているものであろう。

一般化用法では、比喩的にある場所なり境地を捉える場合が多い。十二例のうち二例を採り上げる。

- (26) 「讃岐は極楽浄土のようだ」と詠まれている「讃岐路は……」の歌が直筆で書かれた色紙。右下に崩した文字で「晶子」と記名されている。(00062 2006年2月28日 朝刊 香川全県・1 地方 032 00910文字)
- (27) 小学校に入るまで明治生まれの祖母に抱かれて寝ていた。祖母は「極楽浄土の真ん中だ」と言って床につくのだった。戦前、戦後の農家は朝に星をいただき、夕べに星を見て帰る長時間労働の連続。寝ている間が極楽だったのである。(00146 2003年4月13日 朝刊 オピニオン 2 016 00452文字、読者からの投稿)

「極楽浄土」一般化用法では他の語と比べて、比較的意味変化は小さいと言える。土地の住みやすさや、環境の快適さを比喩的に表現するために転用されるからである。二字熟語で「極楽」と表現する場合も、本来的用法の度数は減り、一般的用法の度数が多くなっているとしても、意味変化は小幅に留まるであろう。

・唯我独尊

この語もまた、字面による一般化意味で流通している例が多い。データベース該当209件のうち、記事本体を参照できなかったのが37件、残る172件の中で本来の用法は15件に留まった。正用法による記事では釈迦誕生譚や、釈尊の誕生日と伝えられるはなまつり（4月8日）関連記事に見られることが多い。正用法と判断される記事においては、釈尊が誕生時に発したと伝えられる「天上天下唯我独尊」との文言八字で引用している例が多かった。正用法例として特徴的なのは、政治家自身による国会演説中に引用されているという点である。金大中・韓国大統領（当時）と、中曽根康弘・首相（当時）の例を挙げる。

- (28) それだけではありません。釈迦は「天上天下唯我独尊」を唱えて、人間の尊厳性を強調し、「一切の衆生は平等である」と善言しました。わが韓国にもそのような伝統があります。東学という民族宗教の創始者たちは「人すなわち天なり」（人乃天）、「人に仕えるに天の如くせよ」（事人如天）と教えています。（00129 1998年10月9日 朝刊 特設ニュース面 006 04848文字、金大中・韓国大統領の国会演説概要＝訂正あり）
- (29) 釈迦は、既に2500年ほど前「天上天下唯我独尊」と喝破し、また仏教思想においては、「山川草木悉皆成仏^{しつかい}」ということがいわれています。これが東洋哲学の神髄です。調和と共棲^{きようせい}、すなわち「共存の哲学」こそ、日本民族が長い歴史の中で育ててきた生き方の基本であると思います。…〔後略〕（00208 1986年1月27日 夕刊 特設ニュース面 003 05012文字、中曽根康弘・首相（当時））

いずれの例においても「天上天下唯我独尊」と八字形式で引用している点が、国会での演説という場において格調を高くしているという要素が考えられる。金大中・元大統領は人間の尊厳性に言及し、「唯我独尊」という語の本来の意味に誤解がないよう配慮されているが、中曽根元首相の演説ではそのような註釈的文言は見られない。これについて当時の官房副長官が、一般的意味で解釈されるという誤解について心配したという記事が見られる。

- (30) 首相自身の筆になる演説原稿の中の「天上天下唯我独尊」のくだりに引っかかりを感じたのは唐沢官房副長官。「首相の高姿勢、独善と映るのじゃないか。野党ばかりか、自民党内にまで反発を招くかもしれない」「大丈夫ですか」と切り出した唐沢氏に、首相はこう答えたという。「キミは知らんだろうが、仏教の世界では『人間の尊厳に目覚めよ』という言葉なんだ。国会で論戦を挑まれるのは望むところだ」（00207 1986年1月28日 朝刊 3 総 003 02036文字）

ここでは元首相自身の言として、「人の尊厳」という本来の意味に言及されている。この裏付けによって、当時の首相が演説で意図した語義および仏教思想への思い入れが明らかとなっている。

政治家自身の発言で、一般的用法で物議を醸した事案があった。その発言に対して本願寺派が抗議したという記事も見られた。2004年8月6日、広島に原子爆弾が投下された日を前にして発表された秋葉忠利・広島市長の発言（31）が発端である。続けて本願寺派の抗議について

報じた記事(32)を掲げる。

- (31) 骨子によると、米国について「唯我独尊主義はその極みに達し、法の支配を無視して小型核兵器の研究を再開した」と強く批判。米国の市民に対し、「人類愛の観点」から、核兵器廃絶の責任を果たすよう呼びかける。(00038 2004年8月2日 夕刊 1 総合 001 00412文字)
- (32) 広島市の秋葉忠利市長が6日の「原爆の日」に読み上げる平和宣言で、骨子に盛り込まれた「唯我独尊主義」の表現について、浄土真宗本願寺派の本願寺広島別院(広島市中区)が「言葉の用法は不適切」と撤回を申し入れた。市は6日未明、文言を変更することを決めた。秋葉市長は2日に発表した平和宣言の骨子で、小型核兵器の研究を再開した米国について「唯我独尊主義は極みに達した」と批判した。これに対し、本願寺広島別院は3日付の書面で「お釈迦様の言葉の誤用」と指摘し、「(唯我独尊は)すべてにおいてどれ一つとして尊くない『いのち』はない、だからこそ尊い」と言葉の真意を説明した。(00035 2004年8月6日 朝刊 1 社会 031 00283文字)

仏教語彙が本来の意味から一般的意味に流用されて流布し、社会的影響力のある立場の人物の発言について教団が看過できずに抗議したという構図は、「他力本願」についての分類(6)丙類と同様である。広島は原爆被爆都市であり、同時に安藝門徒の勢力が強い土地でもある。その市長が、(31)のように「唯我独尊」を一般化された意味で声明に盛り込んだというのは教団にとっても看過できなかったものであろう。また結果としては、声明文が発表の事前に報道され、教団の抗議によって文言が差し替えられたという事実まで報じられている。その意味で貴重な事案である。

他の一般的用法においても、「唯我独尊」という語は独善的、夜郎自大、独断専行、傲岸不遜、高飛車などの意味合いで流用されている。

一般的用法と分類した157件の記事には、喫茶店名、高校野球選手の好きな言葉、フランス料理店名の由来、ヨット名なども含まれていた。喫茶店名やヨット名については、命名者に真意を尋ねてみないと本来の意味・一般的用法いずれを意図しているのか定かではない。ここでは仮に本来の意味ではないものと分類した。

・後生大事

この語は、本来の用法による記事が皆無という点で極端な例である。データベース該当139件、うち17件は記事内容参照不可能であったが、残る122件全てにおいて「後生大事」は一般化された意味であった。これは前半「後生」において、本来の「来世」という意義が無視され、単に「大事」と表現すれば足りるところを「後生大事」と四字連語で定着してしまったものと考えられる。次に引用するのは、宗教学者であり仏教用語についての著書もある中村元氏の発言である(参考文献を参照)。対談を記事にしたもので、発言中に二度「後生大事」と使用している。いずれも一般化した意味合いである。

- (33) 仏典にも出てくる話ですが、「いかだのたとえ」というのがある。旅人が川の岸辺まで

来て、舟がないから、木切れやツル草を集めていかだをつくり、川を渡った。そして、「いかだというのものはありがたいものだ」と、後生大事に肩に担いでまた旅を続けようとしたら、それは愚か者である、というんですね。… [中略] …教義に後生大事にしがみついていますと、宗教というものがかえって手かせ足かせになってしまう。これは、イデオロギーでも同じだと思うんです。(00127 1990年1月8日 朝刊 こころ 011 05436 文字)

語源について熟知しているはずの仏教学者の発言にして、このように一般化用法に流れているというのは、この語の意味変化状況をよく象徴していると言える。「一蓮托生」において「来世を託す」という本来義が忘れ去られたのと同様に、「後生大事」においても「後生」が来世を意味するという本来義は無視されている。

他の一般化例においては「後生大事に守る」というような連語形式が多かった。正用法では「後生の一大事」というよう連語形式もある(次節参照)。この表現であれば、現世ではなく来世こそが一大事であるという教義を率直に強調している。現段階では「後生の(一)大事」が「後生大事」と変化したのが先か、意味変化が先に生じたのか、判断すべき材料には乏しい。

・啐啄同時

「啐」が当用漢字でないために今回、「聞蔵Ⅱ」における検索では「啄同時」三字によって行った。該当は十件でそのうち三件は記事内容が非表示であったが残る七件は全て本来の意味という結果が示された。件数自体が少ないとは言え、全ての例が本来的用法であったというのは他の語彙とは歴然とした差である。次の引用から明らかのように、この語には常に語義を紹介する説明が後続する。それだけ、この語は一般語彙としての流通度が低いと言えるであろう。なおデータベース上では当用漢字以外を表示しないようになっているためか、「そつ啄同時」という仮名交じり表記になっていたが、縮刷版によって確認したところ漢字で振り仮名付きであった。ここでは漢字表記に戻すこととする。

- (34) 禅の世界に「啐啄同時」^{そつたくどうじ}ということばがある。鶏のひながかえるとき殻の中からひながつつくのに合わせて、親どりが殻を破ることである。(00008 1992年7月8日 朝刊 2 総 002 01396文字)
- (35) 「啐啄同時」^{そつたくどうじ}。中のひなと外の親鳥が殻をつついて産まれるさま。それを我が身と重ねる。地元出身の議員が必要という住民の願いにこたえるときがきた、というのだ。(00006 2000年6月16日 朝刊 三重 1 024 02777文字)

記事においては、この語自体が一般的に知られていないという前提で語義の解説が付けられ、その後に記事が意図する状況を報じている。

この語と同程度に本来用法での記事比率が高かった「極楽浄土」では、仏教的文脈の中で語られた内容が多かった。これに対して「啐啄同時」では仏教的文脈を離れて比喩的用法に変化してはいるものの、教える者と教わる者の呼吸が投合するという教訓的意味合いを残している。

3. 語源と時代遡及

この節では通時的視点を採用し、前節で挙げた八語について語源と時代の遡及を行う。

現存する日本語辞書の中で、書誌的記述を最も多く盛り込んでいるのが『日本国語大辞典』であろう。同辞書では詳細な語義説明と共に、古今の著作からの引用を年代付きで収録している。これにより、語彙の意味変化をある程度通時的に辿ることが可能である。以下に、当該語彙についての記述を引用していく。丸囲み数字は、辞書に記載されている順の語釈である。＊は書名、〈 〉内は著者である。筆者の判断により、語釈や引用例など必要と考えられるもののみ引用する。適宜改行を加える。

・「他力本願」

- ① (他力すなわち本願の意) 仏語。自己の修行の功德によって悟りを得るではなく、もっぱら阿彌陀仏の本願によって救済されることをいう。
- ② 事をなすのに、ひたすら他人の力をあてにすることを俗にいう。
 - ＊音引正解近代新用語辞典(1928)〈竹野長次・田中信澄〉「他人の力にのみ依頼してゆくこと」
 - ＊松風(1942)〈石塚友二〉「生きて来れたといふのは、悉く先輩知友諸氏の面倒に負ふので、つまり他力本願で生きて来た恰好です」

語釈①は教義本来の考え方である。②は一般化した意味で、引用例からは前世紀前半にこのような用法が見られた様子が窺える。

『日本国語大辞典』における見出しで「他力の本願」においては、ここに説明されていない多様な側面が浮かび上がってくる。ここでは格助詞「の」一字の有無によって、大きな差が生じている。

「他力の本願」

- ＊源平盛衰記(14C前半)三九・重衡請法然房事「末代末世の重罪の輩も唱へば必来迎預べし、是を他力の本願と名づく。…〔後略〕」
- ＊曾我物語(南北朝頃)一〇・曾我にて追善の事「誠に彌陀の誓願は、十悪五逆の大罪をも、一念十念の力をもって、来迎引接したまふべきたりきのほんぐわん、たのもしかりけり」

この二例は指摘するまでもなく、本来用法に基づいている。助詞「の」一字が介在することによって、「他力」が本来の意味を認識されるという意義は大きい。後代に至り「他力本願」という語形となり、「の」が省かれることによって「他力」が阿彌陀如来を指すという側面が忘却され、「本願」も本来の意味を離れていったものと推察できる。「他力の本願」という語形と比較してみると、この推察を裏付ける結果となっている。

・「お題目」

① 日蓮宗で唱える「南無妙法蓮華經」の称。

* 浄瑠璃・平家女護島 (1719) 「念仏陀羅尼おだいもく一つごっちゃにしゃれかうべ」

* 浄瑠璃・八百屋お七 (1731頃か) 上「をそろしがりて抱ついておだいもくよりお経より」

* 坑夫 (1908) 〈夏目漱石〉「明るいうちから、あの毛布、あの毛布と御題目の様に見詰めてねらひ 甕を附けて来たせいで」

② 口先で唱えるだけで実質を伴わない主張。

* 厭がらせの年齢 (1947) 〈丹羽文雄〉「八十六にもなって、廃人となっても、なほ生命を大切にすることが醇厚美俗のお題目なら、あたしは宗旨変へをするわ」

* 春の城 (1952) 〈阿川弘之〉四・二「西洋の国が〈略〉自らを富ますためにやって来た、あらゆる悪いことを、日本はああいうお題目の下で遅まきながら初めて」

ここでは語釈①に分類されているが、漱石の用例は一般化と認められる。直喩で「お題目のように」と表現することによって、全体としては仏教的文脈から全く離れた状況を描写しているからである。そうすると少なくとも百年前から、この語は一般化された語義で流通していたと判断される。

更に遡って江戸中期の浄瑠璃を見ると、「お題目を唱える」ということから「南無妙法蓮華經」七字を唱道していたのではあるが、信心の表出という意味合いから離れつつある心理が描かれている。本来の意味から一般化への途上と見なせるであろう。

・「一蓮托生」

① 仏語。死後、極楽浄土で同じ蓮華れんげの上に生まれること。一蓮。

* 岷江入楚 (1598) [略]

* 浮世草子・新色五卷書 (1698) 四・五「さあ潔く互に最後を急がん。未来は一蓮托生アツ南無阿彌陀仏」

② (転じてものごとの善悪や結果のよしあしに関係なく) 最後まで行動、運命を共にすること。

* 浄瑠璃・心中宵庚申 (1722) 下「一れんたくしゃうねやの閨のお同行とじゃれてきげんを取りければ」

* 生々流転 (1939) 〈岡本かの子〉「けふは呉越同舟の船かね、それとも一蓮托生の船かね」

* 王国の鍵 (1956) 〈堀田善衛〉「国家が破産するときは、一蓮托生だからね」

語誌

(1) 死後極楽の蓮華の上に生ずるという阿彌陀信仰から出た語である(例えば「観無量寿經」の「生於西方極樂世界於蓮華中結跏趺坐」等)が、「一蓮托生」の形では漢訳仏典にない。

(2) 「源氏—鈴虫」に「はちす葉をおなじうてなと契おきて」とあり、一つの蓮に二人が乗るといふこの語の想は既に平安時代には存在したことが明らかだが、一語としては挙例の「岷江入楚」の例が古い。江戸期に入り、浄瑠璃等で②の意味で多く使われたところから、現在の用法が定着したものと考えられる。

「語誌」に指摘があるように、「一蓮托生」の一般化は三百年前に遡る。書誌上に「一蓮托生」という成語として見い出せないとは言え、発想が平安時代にまで遡及するというのも重要な指摘である。語釈①の下に挙例されている『浮世草子』においても、文脈から判断すれば心中場面のように、来世を契るという定型化された局面においては、一般化された要素が認められる。浄瑠璃『心中宵庚申』においては、「閨のお同行」を形容する場面であるから、完全に本来義を離れて俗化したと言える。

・「億劫」

(「おくこう」の変化した語) わずらわしくて気が進まないさま。めんどくさいこと。おっこう。

* 咄本・近目貫 (1773) 「そんなおっくうな事じゃない」

* 雑俳・俳諧觸一二八 (1827) 「ぬしをもしへに直すおっくう」

語源説 (1) オクコフ (億劫) の転 [大言海]

(2) オホギヤウ (大業) の転 [両京俚言考]

語源二説を比較すれば、音韻変化と表記両面から『大言海』説が与しやすい。『日本国語大辞典』編者自身もこの説を採用している。語釈の記述から推察する限り、経典において想像も出来ないような長年月を意味する「劫」の億倍という語源は立証できないのかもしれない。『わかりやすい仏教用語辞典』(45-46ページ) では、次のように説明されている。

(36) 「方高四十里の城に芥子を満たし、三年毎に一粒を取り去って、ついに全部の芥子がなくなる期間を一劫という」などと説明している。

一劫にしてこのように、気の遠くなるほどの長年月であるから、その一億倍とは想像を絶する単位となる。新聞記事 (20) で説明されているように、「時間が掛かりすぎる」ことから「煩わしい」というように語義変化を経たというのが妥当な分析であろう。経典などで「億劫」用例を検索するのは別の機会に譲る。

・「極楽浄土」

仏語。阿彌陀仏の浄土。この世界の西方、一〇万億の仏土を経たかなたにあるという。一切の苦患を離れた、諸事が円満具足している安楽の世界。[後略] *5

* 靈異記 (810-824) 上・二二「大徳西面して端座し、^{こころ} 広よく卒りき。定めて知りぬ、必ず極楽浄土に生まれしことを」

ここでの最古例が平安初期であることに注目したい。前節で現代日本の新聞記事データベースを検索した結果、「極楽浄土」という語は千二百年間、本来の意味を保ち続けている実態が検証された。これは一見、(1) で立てた仮説の反証となるように思われる。しかし第一節で述べたように、語義変化には時間という単一尺度のみで測りきれない要素が含まれていると考えるべきであろう。この語が千二百年間、本来義を保ち続けたきたという事実は重みがある。

・「唯我独尊」

- ① 仏語。この世界にわれよりも尊いものはないということ。天上天下唯我独尊。
 - * 正法眼蔵（1231-53）行仏威儀「これは人仏の唯我独尊の道得なり」
- ② 自分だけが偉いとうぬばれること。ひとりよがり。
 - * 談義本・地獄楽日記（1755）四・三「弟子ども相手にして唯我独尊と身を高ぶり」
 - * 枯菊の影（1907）〈寺田寅彦〉「唯我独尊の生涯で愉快だらうと夢の様な呑気な事を真面目に考へて居た」

一般義②の用例は現代から二百五十年遡り、江戸中期・宝暦年間に至る。字面を表面的に解釈すれば、この語が一般語として独歩する一端が窺える。これは二百五十年前も現代と同様にこの語が一般化されていたという裏付けである。現代に限らずどの時代にも、このような夜郎自大な人物に事欠かないという現れであろう。『正法眼蔵』から宝暦年間までの五百年間にこの語がどのような意味変化を遂げていたかを追跡することは今後の課題としておく。

・「後生大事」

- ① 仏語。来世の安楽を最も大切とすること。信心を忘れないこと。
 - * 説経節・説経荊萱（1631）上「それよりも、れんげだにきこえたる、かやんだうと申にとりこもり、ごしょう大しとおねがいあるは、たとへんかたはなかりけり」
- ② 常に心をこめてつとめること。物事を大切に保持すること。また、大げさに慎重なさまをからかっていうこともある。
 - * 浮世草子・日本永代蔵（1688）四・三「今の劔昔の^{ながたな}菜刀とさびて、又もとの^{じゅうずや}珠数屋を後生大事として、命の珠をつながれ」
 - * 諺彦（1797）「後生大事拳拳奉持する意」
 - * 俳諧・文化句帖（1806-11）「白露や後生大事に鳴雀」
 - * 滑稽本・浮世風呂（1809-13）前・上「よいよいははだかになりて、手ぬぐひをいくちなく、前へあて、ごしょうだいじにむかふをにらみつめて、はいがらくりのあしどりであゆむ」

語誌

- （1）「後生一大事」ともいう。「後生こそ一大事なり」「後生の一大事」（蓮如御文章一、五）のように分離していた表現から、近世初頭に縮約してできた語。
- （2）「後生」と「大事」が主述関係に立つ場合と同格関係の場合があり、また「後生」の内容が、「後生菩提・極楽往生」を指す時と、それを願つての「信心・精進」まで含めていうときとがあるため、個々の用例の意味解釈は文脈によって異なる。
- （3）②の挙例のように、「に」を伴って副詞的に用いられることが多くなり、現代に及ぶ。

ここで語誌の記述は、通時的背景を探るのに極めて有益である。元来は「後生の一大事」というように、格助詞「の」によって文法関係が明確であった。経時的变化として「後生大事」と「の」が省かれ、「後生大事に」というように助詞「に」を伴った連語形式が一般的になったの

であろう。語釈②に挙げられた『浮世草子・日本永代蔵』用例からは、江戸初期に既に一般的用法の流布している様子が垣間見られる。現代に至っては、本来的・教義に基づく用例は皆無という極端な偏りとなっている。これは「後生が来世を意味する」という前半部分が完全に忘れ去られ、単に「大事である」と表現すべき場面で「後生」が無意味的に付け加えられているという分析を裏付ける説明となっている。

・「啐啄」^{*6}

① 禅宗で、機を得て学人と師家との両者の心が投合することにたとえる。しゅったく。

* 正法眼蔵 (1231-53) 面授「一祖、一師、一弟子としても、あひ面授せざるは、仏々祖々にあらず。〈略〉また啐啄の迅機なるなり」

* 文明本節用集 (室町中)「啐啄 ソツタク」

② 逸してはならない好機。それぞれがぐあいよく合致して、それをのがすと他には得られなくなるような機会や時。しゅったく。

* 信長記 (1622) 一四・御馬揃の事「誠に上下啐啄の時こそ、いと宜しく見えたりける」

『文明本節用集』によると、「ソツタク」という慣用音は室町中期から広まっていたことが判る。また語釈②は、仏教語から離れて一般化した意味と考えられるが、逆に現代ではこの語義で使われることは稀であろう。今回の新聞記事データベースによる検索では、②のような語義での用例は見られなかった。この語義による一般化が室町時代末期から江戸初期にかけて出現したものの、現代に至っては廃用に近くなっているとすれば、一般語化は複雑な様相を呈することとなる。すなわち意味変化は拡大の一方だけではなく、一旦拡大された意味が縮小することもある、という逆方向性も考慮せねばならないことになる。『広辞苑』第三版では②の語釈は残っている^{*7}。これについては、より多くの語彙項目で検証する必要もあるので、詳細は次の機会に譲る。

4. 分析と結び

この節ではここまで検証してきた結果を数量化し、若干の分析を行う。ただしこの分析は、対象とした語彙項目が僅かに八であるという点と、紙幅の制限から限定的なものである。

以下に、この小論で検証した八語彙項目について、データベース出現の総度数、見出しのみで内容を参照できなかった記事の度数、本来用法による記事の件数、内容を参照できた記事中に占める本来用法の占める比率、本来用法と一般化用法それぞれの初出年代を一覧表にして示す。

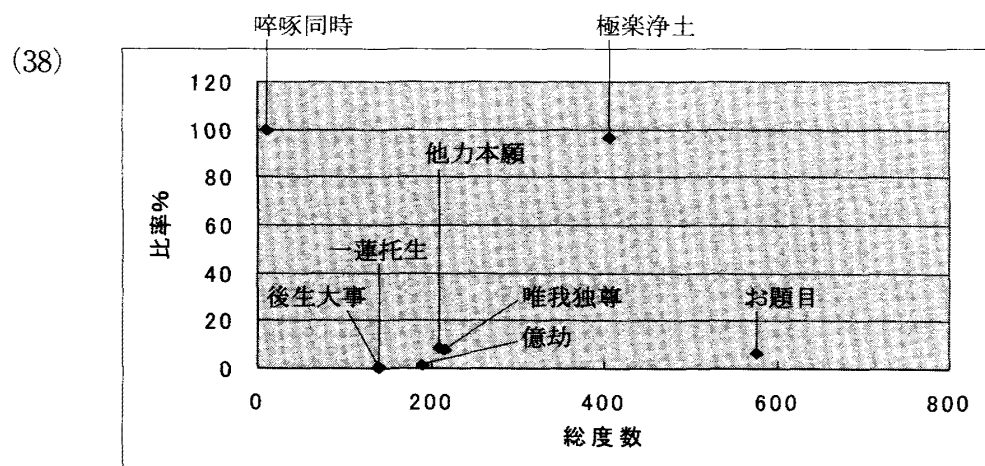
(37)

語彙	総度数	見出のみ	本来用法	比率 %	本来義初出	一般化初出
他力本願	216	26	17	7.9	14世紀前半	1928
お題目	578	66	34	6.6	1719	1908
一蓮托生	139	20	1	0.8	1598	1722
億劫	190	48	2	1.4	—	1733
極楽浄土	406	59	335	96.5	810	—
唯我独尊	209	37	15	8.7	1231	1755
後生大事	139	17	0	0	1631	1688
啐啄同時	10	3	7	100	1231	1622
(全体)	1887	276	409	25.4		

全体では本来用法の比率が25.4%という結果になっているが、これは「極楽浄土」一語が引き上げているという面が大きい。この語は本来用法の比率が96%台という高率であり、件数でも三百件を超え、全体の本来用法例409件の約八割を占めている。仮にこの語を除外して七語彙について再計算すると、全体の本来用法比率は5.9%に過ぎない。

本来用法と一般化用法それぞれの初出年代では、前者が後者に先立つという点が確認された。これは、仏教語彙として本来の意味が基本であり、そこから意味が拡散あるいは変化して一般化していくという経過を示す傾向である。

次に表(37)において、相関関係が成立しているか否かを検証するために、総度数を横軸、本来用法比率を縦軸にとって二次元グラフで表示してみる。こうすると横軸は一般語彙としての流通度を、縦軸は仏教語彙としての本来語義残存度を表していると考えることが可能である^{*8}。



これら二系列の指標で相関係数を求めると-0.082という結果が得られた。これによって、データベース出現頻度と本来用法比率には関連が見られないと判断できる。今回は対象語彙が八と限定されていたが、より厳密に総度数と本来用法比率の相関係数を求めるためには角岡(2003)で抽出したように少なくとも百を超える語彙項目を対象とする必要があろう。その考察は次の機会に譲る。

これら八語を、本来用法比率の高いものから低い順に並べ替えると、次のようになる。

(39) 啐啄同時 > 極楽浄土 > 唯我独尊 > 他力本願 > お題目 > 億劫
> 一蓮托生 > 後生大事

語彙項目数が僅かに八という小集団ではあるが、本来的用法の比率について敢えて範疇化してみると、次のようになる。

(40)	本来的用法比率が90%超	「啐啄同時、極楽浄土」
	同、1%以上90%未満	「唯我独尊、他力本願、お題目、億劫」
	同、1%未満	「一蓮托生、後生大事」

ここまで、冒頭に掲げた仮説(1)を具体的に検証するには至らなかったが、現代日本における仏教由来語彙使用について一端を分析した。今後は、語彙の意味変化原因として、一般化度・意味変化の類型(拡大、類推、比喩など)・本来用法の残存比率など多変数で解析する必要があるだろう。

註

*1 各範疇の語を掲げておく。

語源：ばか 禅語：一箇半箇 短縮：祇園、菩薩 非仏教用語：冥福
それぞれ分類の理由などについては、角岡(2003:22)を参照されたい。

*2 データベースでは伏せ字になっていないがここでは、語彙自体が極めて不適切であることと、あまりの品位の無さに鑑みて敢えて伏せ字とする。失言内容について、前半の「憲法は他力本願」だけで閣僚罷免となったか否かは判断しがたい。

*3 「題目」で検索すると、1117件が該当した。当然、この1117件中には「お題目」で該当した記事も全て含まれている。

*4 「これ」という意味の隠語。状況によって種々の含意があるが、ここでは親指を立てていることから「男」を指す。

*5 この語釈は「極楽」の①である。「極楽浄土」の語釈にはこの一つしか掲げられていないが、「極楽」には次のような語義が挙げられている。

② 遊里の俗称、③「極楽往生」の略、④「極楽落とし」の略、⑤ 糶^{かいよね}(=貯米)売りの一形式、⑥(極楽に生えているところから)蓮、蓮根。

*6 『日本国語大辞典』での見出しは「啐啄」二字で、「啐啄同時」の四字では見出しとなっていない。「啐」を「そつ」と読むのは慣用音であると附記されている。これに続いて次のような説明がなされている。「啐」は鶏卵が孵化しようとするとき雛が殻を内からつつくこと、「啄」は母鶏がそれに応じて外から殻をつつくことの意。

*7 『広辞苑』第三版での語釈は次のようである。

①〔仏〕禅宗で、機を得て両者相応すること。② のがしたらまたと得がたいよい時機。
「啐啄」は、『岩波国語辞典』規模の辞書には見出しとして採録されていない。

*8 「啐啄同時」は、総度数が十で他の七語彙に比べると一割未満と極端に少ないことに加えて、内容が確認できる全用例が正用法に基づいているという二点において特殊である。このことを勘案して、(38)の縦軸では本来用法比率を採用する。

参考文献

- 瓜生津隆真（1985）『仏教から真宗へー仏教用語散歩』京都：本願寺出版社。
- 大谷大学（編）（2001）『仏教が生んだ日本語』東京：毎日新聞社。
- 柏原祐義（編）（1935）『真宗聖典』京都：法蔵館。
- 菅野覚明（2001）『神道の逆襲』東京：講談社。
- 桂米朝（2003）『上方落語 桂米朝コレクション5 怪異霊驗』東京：筑摩書房。
- 角岡賢一（2003）「一般語彙として流通する仏教用語の考察」『龍谷紀要』第25巻第1号。pp. 17-35.
- 角岡賢一（2004）「新聞記事データベースに見られる仏教用語」『龍谷紀要』第26巻第1号。pp.35-54.
- 角岡賢一（2006）「仏教語彙受容史研究序説」『龍谷紀要』第28巻第1号。pp. 77-94.
- 浄土真宗教学研究所（編）（1996）『浄土三部経（現代語訳）』京都：本願寺出版社。
- 新村出（編）（1983）『広辞苑』（第三版）東京：岩波書店。
- 大法輪閣編集部（編）（2004）『わかりやすい仏教用語辞典』（新装版）東京：大法輪閣。
- 高田信良（2006）『宗教の祈り 親鸞の願い』京都：法蔵館。
- 武田龍精（2003）『宗教と科学のあいだ』京都：法蔵館。
- 中村元（1984）『ブツダのことば スッタニパータ』東京：岩波書店。
- 中村元（編著）（1998）『仏教語源散策』（第二版）東京：東京書籍。
- 中村元（編著）（1998）『新仏教語源散策』（第二版）東京：東京書籍。
- 中村元（編著）（1998）『続仏教語源散策』（第二版）東京：東京書籍。
- 奈良康明（編著）（2005）『新版 日本の仏教を知る事典』東京：東京書籍。
- 西尾実、他（編）（1971）『岩波国語辞典』（第二版）東京：岩波書店。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会（編）（2000-2002）『日本国語大辞典』（第二版）東京：小学館。
- 松村明（監）（1995）『大辞泉』東京：小学館。
- 宮元啓一（2005）『なるほど仏教用語400』東京：春秋社。
- 村上哲見、島森哲男（編）（2002）『四字熟語の泉』東京：講談社。
- 森章司（編）（1991）『国語のなかの仏教語辞典』東京：東京堂。
- 山折哲雄（編）（2000）『仏教用語の基礎知識』東京：角川書店。